『空の宝石に囲まれて』

－空翔ける羊飼いの群れシリーズ１－

第一章　「再会」

もう、ここへ帰ってきてから１週間ほどになる。自分の育った街に会えること、そのこと自体にはまるで問題がない…。いや、むしろ嬉しいくらいで文句を付ける気もないんだけど…。それにしてもここまで予定がずれ込んでくると、そろそろアーシアから何か言ってくる頃だ。
どうせなら休暇を取ってくれれば良かったかな。そうすりゃ少しは気晴らしになったかもしれない。
俺は自分専用機を作って貰うために、久しぶりに信州に戻ってきていた。*Ryo* 先輩にはブルーバーという専用機があるのに、俺にはいつもレンタルなもので、つい先日グレンにそのことを言ったら、なぜか笑って許してくれた。とりあえず俺はここの科学部付きという身分を貰って、久しぶりに自分の古巣に戻ってきていた。しかし、来たそうそうシモさんにこき使われる羽目になって、古巣を懐かしむなんて余裕はこれっぽちもない。
それでもそれが自分専用の船のためだと思うと苦にならないから不思議なものだ。
実は後で聞いた話しなんだけど、普通はもっと設備の整ったロンドンあたりに依頼するものなんだそうだけど、どうしてもシモさんに作って欲しかったのと、やっぱり日本製が欲しかったことから、強引に頼み込んでしまった。今となっては、それが裏目に出たとしか言いようがない。
「たっちゃん、ちょっと手伝ってくれないかな？」
「えぇ、何ですか？」
「いや、たいしたことはないんだけど、*POWLA-KNIGHT* のチェックをやろうかと思うんだけど、いい機会だからたっちゃんも一緒にやった方が覚えるのにいいかなと思ったんで。」
「あ、ぜひお願いします。何が不安って言っても、今回はそれが一番不安なんですから。」
ちょうど何もすることがなくなって退屈していた時だけに、くまさんのこの誘いは好都合だった。それに POWLA-KNIGHT を１回は自分の目で見てみたかったし。
なんでも今度作ってくれている船にはこの *POWLA-KNIGHT* を実験的に組込むとかで、この先好むとこのまざるとに関わらず、俺はこいつに慣れなきゃならない運命にある。
「でも、どうして俺の船にこいつを搭載しなきゃならないんですかね。それなら、それ専用の船を１機作れば済むことなのに…。」
「実用的なデータを取るためには、たっちゃんみたいな人に使って貰うのが一番早いからね。それに、シモさんは以前からたっちゃんに何かあげたいと言っていたから、プレゼントのつもりなんじゃないかな。」
「それだったら、そんなシステム要らないから、早く作って欲しい…。」
「アルトナイトの完成が遅れているのは、べつに POWLA-KNIGHT のせいじゃなくて…。」
「分かっています。緊急の任務でロンドンに呼ばれたからでしょ。あーあ、こんなことなら初めからロンドンに依頼すればよかった。」
「愚痴らないの。ほれ、始めるよ。」

くまさんは *POWLA-TWIN* と書かれたファイルを開くと、見事な手裁きでスイッチを次々に入れていく。
「シモさんがいない時に勝手にいじくって大丈夫なんですか？」
「もともと *POWLA-KNIGHT* を作ったのは私なんですが…。シモさんは確かに *POWLA* システムについてここで一番詳しいとは思うけど、*POWLA-KNIGHT* に限って言えば私の方が詳しいんです。」
「それは失礼しました。」
くまさんから渡されたフローチャート通りに、くまさんはオペレーションチェックを続ける。その手付きを見る限りでは、俺の心配は本当に思い過ごしだったことが分かる。
3 年前、まだ俺がここにいた頃は、シモさん以外の人が *POWLA* システムを動かすなんてことは考えられなかった。もっとも当時、くまさんが科学部に腰を落ち着かせていたらどうなっていたかはちょっと分からない。
キャテイが正式にアウターツェンとして加入した直後、それまでも膨大な情報量を処理し続けていた *POWLA* に補助システムとして *POWLA-TWIN* が付加された。少なくともこの時点での予想では、この先 10 年くらいはシステムのパンクが起きることなどないだろうと誰もが考えていた。しかし、実際にはその 1 年後に民間で完成した *CAPERA* システムが、結局 *POWLA* システムの負荷となってしまい、ここ数ヶ月の間に原因不明のシステムダウンが何度となく起きていた。
実を言えば、情報部の間では *CAPERA* システムの欠陥は早くから指摘されていて、それらの話しを総合すると、おおよそ現在の事実と一致していた。
POWLA-KNIGHT は今までの *POWLA* からは完全に独立したシステムを前提として作られており、万が一 *POWLA* がシステムダウンしても影響をまったく受けないように設計されている。いわば *POWLA* のバックアップシステム的要素が強いコンピューターだ。
そのせいか、シモさんが設計段階で遊んだせいか、*POWLA-KNIGHT* では自由なシステムが組めるようになっていて、*ALTO-KNIGHT* なんかはその代表的な例と言える。
グレンには結構早い時期から、チャンスを見つけて *POWLA-KNIGHT* の資料を手に入れてこいと言われていたから、*POWLA-KNIGHT* その物を持ち帰ったとなれば、きっと目を丸くすることだろう。
「そういえばいいんですか？情報部の人間にこんな物を持たせてしまって。あっという間にコピーが出回ってしまいますよ。」
「大丈夫、そいつも既に計算済だから、たっちゃんは普通にこいつを使っててくれればそれでいいようになっているから 。あっ、ここの操作はあとできっと 使うはずだから覚えておいた方がいいよ。」
「え、何ですか？」
「旧 *POWLA* のモニターなんだけども。こいつはいざと言う時に *POWLA* システムをすべて背負わなければならないんだけど　、それも 瞬時に切り換えられなければ 意味 がないので 、常に旧 *POWLA* をチェックしているんだ。ここの部分なんかはたっちゃんあたりのほうが使い道があると思うんだけど…。」
「そうですね。」
くまさんの手付きを見ながら、今さらながらにその手際の良さに感心してしまう。そりゃ、3 年前

にここでシモさんに無理矢理やらされていた頃に比べれば、俺も結構早くなった方だけど、ここまで素早くは手が動かない。
「そう言えば、先週のキャティで起きた電波障害の話しは聞きました？」
くまさんの手が一段落ついたところで、キャティの話しを切り出してみる。一般の人に比べて、くまさんのキャティ通はこの信州においては余りにも有名な話しだから、俺はここに帰ってくる度にキャティの話しをすることになる。
「いや、ニュースパックの範囲でしか知らないけど…。わざわざそういう風に話しをしたと言うことは何かあるんだ。」
最近、やけに勘がいいと言うか、毎度のことだからお互い慣れっこになっているというか。しかし、こうしてトップシークレットを何回くまさんに話す羽目になったんだろう。いや、なんのかんのと言ったところで、俺もキャティのことを愛してる１人だと思っているから、どうしても気になってしまうんだよね。
「ニュースパックではたぶん彗星によるものとなっていた筈ですよね？」
「確か…、今度太陽系に初めて接近するファズアース彗星だろ？」
「実はファズアースは彗星でないという話しなんです。」
「ん、ちょっと待って…。」
くまさんの中に何か引っかかるものがあったのか、急に顔つきが変わったと思ったら、*POWLA-KNIGHT*のパワーを落としてしまった。
「で、それじゃあ、情報部ではいったい何だと考えている訳？」
「情報部の中では宇宙都市のような何か人工物の可能性が強いという判断です。」
「根拠は？」
「電波障害です。キャティで起きた電波障害はファズアースから出ている強い電磁波によるものなんですが、この電磁波の中にどうも人工的な記号体系が混ざるらしいんです。」
「らしい…ということは、まだはっきりとは確認していないんだ。」
「この件は情報部内でも余り流れてこないんです。おそらく*Ryo*先輩でもそれ以上は知らないと思います。」
「そうか…、じゃあ、あとは自分で調べてみるしかない訳だ。うん、たっちゃん、わざわざありがとう。あとはこのファイルを見ながら勉強するといいよ。」
「え…？」
いきなり立ち上がったくまさんは俺にファイルブックを押しつけると、どこへ行くとも言わずに出ていってしまった。
とりあえずは*POWLA-KNIGHT*のチェックは終わったようだし、俺１人でこいつを操作する気は全然ないので、自分の部屋に戻ってきた。今の科学部には昔ほどの活気はなくなっていて、知っている人がみんないなくなったこともあって、本当はなんとなく居心地が悪い。
本当なら情報部の部屋があってもよさそうなものなんだが、どういうわけだか未だに存在しない。一時期情報部の部屋として使用していた資材課の倉庫も、留守にしていた間にまた倉庫に戻されていた。
「三好くん、ちょっと…。」
「はい？」

ボーッとしていたところへいきなり呼ばれて、一瞬誰に呼ばれたのか分からずに捜してしまった。
「あ、こっち、こっち。」
大内とか言ったっけ…、彼も俺が出ていったあと信州に来たうちの１人だ。今まで特に用もなかったので、挨拶以上に言葉を交わしたこともなかったが。
「これ、文化部からなんだけど、*POWLA-TWIN*がトラブっているらしいんだ。悪いけど行って貰えないかな。三好くんは*POWLA*に触れるんだろ？」
「えぇ、いいですよ。」
俺は大内からホワイトホンを受け取った。
「もしもし、電話代わりました。三好と言いますが…。」
「えーっ、三好せんぱい！本当にあの三好せんぱいですかぁ？」
「なんだ、アリコちゃんか、どうしたの？」
「あー、良かったぁ。*POWLA-TWIN*が壊れちゃって、すぐ来て戴けませんか？」
「分かった、すぐ行くよ。」
文化部のアリコちゃんが、こうやって俺のところへ助けを求めることが昔は本当に日常茶飯事だった。あの頃は*POWLA-PICO*が拗ねて動かないだとか、*POWLA*とアクセスができないとかがよくあったからなぁ。
「悪いね。生憎と指田先輩をさっきからポケベルで呼んでいるんだけど、まったく応答しないんだ。」
「だろうね…。たぶん、今頃はもう地球にはいないよ。」
さっきくまさんから渡されたファイルブックを持ち上げると、彼の肩をポンと軽く叩いて文化部に向かう。階段を１つ降りて右側のドアを開けたところがアリコちゃんのいる文化部の部屋だ。
「わぁ、三好せんぱい、どうもすいません。」
「久しぶりだね。今日はどうしたの？」
「*POWLA-TWIN*が急に動かなくなっちゃったんです。今日は室長も外出していて、あたしだけじゃどうにもなんなくて…。」
「いいよ、いいよ。俺も*POWLA-TWIN*は分からないけど、ちょっと見てみるよ。それにちょうど暇していたしね。で、どっち？」
「あ、こっちの部屋です。」
昔とまったく変わらない仕草で慌てているアリコちゃんを見ていると、なんとなく面白い。
「連れてきました。」
ドアを開けるなりそう叫んだ先に、初めて見る*POWLA-TWIN*とどこかで見たことのある女性…。えっ…。
「遅いじゃない…。あら、たっちゃん…。」
「あ…、お久しぶり。」
*POWLA-TWIN*の前でイライラしながら立っていた女性、それがまさかこんな形で会うとは思いもしなかった研修生時代のクラスメイトだった。市瀬美佳…確か階級は俺より１つ上の中尉だったと思う。以前会った時はステーション勤務だったはずだけど…。
「いつからここに…？」
「話しなんていつでもできるんだから、とにかく先にこれをなんとかしてよ。」

「あ、はい…。」
彼女にはどういう訳だか昔から勝てない…というより、あの時のクラスメイトにはたいがい頭が上がらない。これといって理由がある訳でもないんだけど、彼女はその中でも特に苦手だった。
「アリコちゃん、パワーを入れてみて。」
「はい。」
とりあえずマニュアルを読みながら適当に動かしてみる。
*POWLA-TWIN*に触ったのはこれが初めてだというのに、さすが設計者が同じだと拗ね方もそっくりで、これなら *POWLA-PICO* とほとんど変わらない。たぶん、すぐ直る。
「こいつの操作方法ってほとんど *POWLA-PICO* と一緒でしょ。」
「えぇ、科学部の室長に言って、わざわざそうして貰ったんです。直りそうですか？」
「大丈夫だよ。アリコちゃん、１回パワーを落としてくれる？」
「はい。」
マニュアルからこいつのリセットキーを捜しだす。シモさんが *POWLA-PICO* と完全に同じに作ってくれていれば、たぶんこのスイッチで直る筈。
案の定、ローカルモードで立ち上げ直してやるとキーワードを訊いてきた。俺はキーボードからリセットキーを打ち込んでやる。これでよし、再びアクセスモードで立ち上げ直せばＯＫだ。
「分かったの？」
「なんとかね、たぶん誰かがキー操作を間違えたんだと思う。ところがエラー処理が完了する間もなく、次から次へとエラーが重なったものだから、*POWLA* が処理しきれなくなってダウンしたんだというのが理由だと思う。」
「ごめん、あたしだ。あたしが何か間違えていたんだと思う。」
彼女が素直に謝る。
「*POWLA-PICO* にもよくあったトラブルだけど、マニュアルを読む限りでは *POWLA-TWIN* の方がその辺の処理速度がアップしているみたいだから、よっぽどキータッチが早いんだ。」
彼女はちょっと *POWLA-TWIN* を見つめて、不意に何かに思い当ったように振り返る。
「ひょっとして、*POWLA-TWIN* と *POWLA* ってに根本的にキー操作が違うってことある？」
「同じだと思っていたんだ？」
それで原因が分かった。しかし、よくあるトラブルと言ったけど、ひょっとすると非常に珍しいトラブルかもしれない。各ステーションには *POWLA* の端末機ではなく、*POWLA* 本体が設置されている。ステーション勤務の者が両方を同じつもりで操作をすれば当然こういう結果になる。
しかし、今までステーション勤務経験のあるものが信州にいなかった訳だから、シモさんだっていくらなんでもこういうケースは想定しなかったんだろうなぁ。
「*POWLA-TWIN*は命令の最初に必ず *POWLA* 本体とアクセスするための *POWLA* 命令文が入るんだ。つまり、一番最初からエラーを入力していたことになる訳。」
「そうか…。やっぱりアリコちゃんに教わってからやればよかったわ。」
「そんなぁ…。」
一応それらしくうなだれてはいるけど、彼女がそんな性格ではないことはよぉく知っている。それとも、俺の知らないこの何年かの間に少しは可愛らしさを身に付けたのか。
「でも、一番悪いのはそういう風に作った奴よね。」

お一お、立ち直りの早いこと。はいはい、その言葉、そのままシモさんに伝えておきます。どうせ、彼女のことだから、自分はマニュアルなんか読まなくても大丈夫だと思ったんだろう。
「どう、せっかくだから一休みしてお茶でもどう？」
「相変わらずね。ま、たっちゃんのその後も聞いてみたいし、場所は…？」
「ライアングでどう？小諸駅から少し裏に入った所に…。」
「知っているわ。アリコちゃんもどう？」
「あ、あたし、まだ仕事が残っていますから。」
「じゃ、少し行ってくるわね。…室長には内緒よ。」

第一章　「再会」

H.6.18.MAR

第二章　「波紋」

「おい、ちょっといいか？」
ここ暫く退屈しきっていた俺の所に久しぶりに *Ryo* 先輩が姿を現した。しかも、どういう訳だかロンドンにいる筈のシモさんと、ここ数日信州では行方不明ということになっているくまさんも一緒だった。
「どうしたんですか？3 人揃ってなんて珍しい。」
「なにを寝惚けたことを言っているんだ。仕事だよ。外に行くから明日の朝までに準備をしておけよ。」
「え…、だって…、俺のアルトナイトは…。」
「ブルーバーで行くに決まっておろうが、貴様の船など待っておれるか。」
「はーい。」
Ryo 先輩が外に行くと言えば、それは外宇宙へ出ることを指す。ということは、またいつここへ帰ってこれるかまったく分からないということでもあった。まぁ、それはそれでとりあえずは構わないんだけど、*Ryo* 先輩と出かけると、いつの間にか 1 人ぼっちになっているということが少なくない。いきなり外宇宙で取り残されるのは、ちょっと辛いものがある。
「ところで、くまさんとシモさんも一緒に行くんですか？」
「まぁね、ちょっと事情ができちゃって、べつに急ぎって訳でもないんだけど、ちょうどいい機会だから一緒に行こうと思って。アルトナイトの方もちゃんと帰ってきてからやるから。」
シモさんは悪びれた様子もなく、そうさらっと言ってのける。確か最初に俺が頼みに行った時は、1 週間もあれば楽勝って言っていたのに…。
「じゃ、そういうことでよろしく頼むわ。」
「え…。」
Ryo 先輩は現れた時と同じくらいの唐突さで行ってしまった。最近、既に驚くだけの神経がなくなってしまったことが妙に悲しかったりもする。
「で、今回はみんな揃ってどこへ行こうっていうんです？」
「さぁ…？」
「さぁ…って、シモさん、どこへ行くのかも知らないで一緒に行くつもりなんですか？」
「だって、私は *CAPERA-SEND* の実験をしに行くだけだもん。要は実験ができる場所ならどこでも構わない訳。」
CAPERA-SEND…、これ以上 *CAPERA* システムを拡張させて大丈夫なんだろうか？*POWLA* システムだけでもボロボロだっていうのに…。
「とにかく、俺は明日までに何の準備をしておけばいいんですか？」
「さぁ、特に *Ryo* は何も言ってなかったから、適当にやっておけばいいんじゃない？」
「くまさぁーん。」
「いや、本当に我々も聞いていないないんです。仕方がないんじゃないかな？」
「じゃ、そういうことにしておきます。」
なぁんか一気に疲れが出てきてしまった。俺はドッとのしかかる疲れを肩で受け止めながら、重い足取りで科学部を出た。ひょっとして俺は情報部の中で一番不幸かもしれない。そういえば、一昔

前までは信州局の中で *Ryo* 先輩に会うと幸福になるという噂があったけど、最近では *Ryo* 先輩に会う度に苦労が増えていく気がする。
ボーッと歩いていた俺は、どうも無意識のうちにライアングまで来てしまったらしい。いつも頭が疲れるとここで紅茶を飲むというのが、昔からの俺の癖なんだけど…。今日あたりはなんとなく彼女がここに来るような気がする。彼女…、市瀬美佳にこの店を紹介したところ、どうも気に入ってしまったらしく、よく入り浸っているとマスターが言っていた。
しかし、今日はこれ以上、疲れるような会話はしたくない。できたらこのまま帰った方がいいかもしれない。
「あら、たっちゃん。そんなところに突っ立ってると邪魔よ。入るのか入らないのかはっきりしなさいよ。」
あちゃ…、最悪のタイミング。
「いや、どうしようか考えていたんだけど…。うん、つき合うよ。」
「あ、でも、もう少しするともう１人来るんだけど、それでもいい？」
「俺は構わないけど…、でも彼氏かなんかと待ち合わせだったら遠慮するよ。」
それには答えず、彼女は笑ってごまかすと先に店の中に入って行ってしまった。俺は仕方なしに後からゆっくり店に入る。
店内には奇妙なメロディが相変わらず流れている。ここのマスターとはよく話しをするが、そう言えばこのメロディがどこの音楽なのかは聞いたことがない。
ん…、薄暗い店内を少し見回して彼女を見つけた。彼女は窓際の４人掛けのテーブルを選んでいた。いつも１人で来るから、この席に座るのは初めてだった。
「そういえば、まだ君が信州に来た理由を聞いてなかったけど、話してくれる気は？」
「そうねぇ、どうしようかしら…。」
こうやって、こっちの問いを適当にはぐらかすのは彼女の昔からの癖だ。ちょっと気を許すと、いつの間にかに彼女のペースに巻き込まれ、彼女のいいように利用されてしまう。俺はそれで研修所時代に何回泣かされたことか。
「レモンティをお願いします。」
「へっ…？」
少し考える素振りの末に出てきた言葉がこれだった。もちろん、これは俺に対してではなく、いつの間にかにオーダーを取りに来ていたマスターに対して言った言葉だ。
彼女はこれでもう自分は用が済んでしまったんだという顔をして、俺にメニューを押しつける。
「どうしたの？そんな恐い顔をして。何にするのよ。」
「え…と、じゃあ、菩提樹をお願いします。」
なんだかよく分からなかったが、メニューの一番上にマスターのお薦めと書かれていた物をオーダーする。マスターはいつものように無愛想に肯くと、カウンターの方に戻っていった。
「で、どうして信州に来たって？」
「まぁ、恐い。まるで尋問を受けてるみたいね。どうしてあたしがここに来たっていうだけで、たっちゃんに攻められなきゃならないのよ。」
当然なまでの抗議が返ってくる。しかし、こんなことでいちいち引き下がっていたら情報部員としてやっていけない。

「不自然なんだよね。研修所では常に俺より上にいて、卒業後だって真っ先にステーション勤務に就いた。階級だって現在は中尉の筈でしょう。そんなひとがわざわざ暇な信州あたりを選んで地上勤務をするのは、どう考えてもおかしいと思わない？」
「思わない。」
当然といった表情で答えが返ってくる。
「疲れるのよ。あたしだってたまには地上でのんびりやりたかったのよ。」
「そんな理由で納得できると思う？」
「あら、納得しようがしまいがあたしには関係のないことだわ。まったく、男のくせにごちゃごちゃうるさいわね。」
再び言い返そうと思ったところに、マスターがレモンティと菩提樹を持ってきたので、なんとなく言いかけた言葉を引っ込めてしまう。俺は仕方なく自分の前に置かれたティカップを黙って睨み付けた。
だいたいステーション勤務というのはなりたくてなれるものじゃないのだ。毎年何人もの研修生がステーション勤務を希望しながら地上勤務に配属される。そして、地上勤務に就いたら最後、まず余程のことがない限りステーション勤務になることはなかった。いつかステーション勤務に就けることを夢見ながら、一生を地上で終えるものが大半なのだ。
それなのに彼女はただ疲れたという理由で地上勤務を希望したと言う。普通なら信じろという方が無理だと思う。
俺だってついこの間までは、外を飛ぶことに憧れたその他大勢のうちの１人だった。はっきり言ってラッキーなんて単純な表現では済まないくらいの大きな幸運を与えられて、やっと外に出れたのだ。申し訳ないが、彼女のこんな「疲れた」程度の理由では納得する訳にはいかなかった。
「ふーん、面白い香りね。」
彼女は菩提樹の香りを前にして、少し興味深気な表情を作る。
「そういえば、トモミくん、彼はどうしているかしら？あの子ったらいつもボーッとしていて、これといってなんの取柄もなさそうだったし、あたし一番心配していたんだけど。」
「若狭なら辞めたよ。今は何をしているかは知らないけど、たぶん普通の道を選んだんじゃないのかな。」
「あら、そうなの。ちっとも知らなかったわ。」
う…、つい彼女のペースに乗せられてしまった。体よく昔の話しで、肝心な話しをはぐらかされた様な感じだ。
これは俺の勘ではあるけど、彼女が地上に戻ってきた理由は、 疲れた」なんて簡単な理由でなく、もっと複雑な事情があるような気がしていた。きっと、彼女には彼女なりの理由があって…、その理由が知りたかった。どうしてだか分からなかったが、とても強い衝動が湧き出てくるのを感じてとても強い衝動が湧き出てくるのを感じていた。
「*MIKA*、遅れて申し訳ないです。」
金髪にブルーの瞳、一目見てヨーロッパ系と分かる顔立ちを持った紳士は、この店に入ってくるなりそう大声で叫んでいた。その瞬間、店内にいた数少ない客は全員、この大声に驚いて店の入口の方へ振り返っていた。
「どうやら待ち合わせの相手らしいね。」

「そうらしいわね。」
彼女はやれやれといった感じで肩をすくめて見せる。
「じゃ、帰るよ。」
「あ、待って…。」
彼女の思いもかけない制止に、思わず浮きかけた腰が再び沈む。カップに残っていた紅茶を飲み干そうとした右手だけが、なんとはなしに行き場を失っていた。彼女の言葉に従ったというより、俺自身が彼女の相手に興味があった。
「待って、いま紹介するから。」
一瞬、彼女の表情に懇願の様なものが浮かんで、そしてすぐ消えた。
「Oh、本当に本当に申し訳ないです。」
見かけの体格のよさと大きな声からは想像がつきにくいほど、この紳士は彼女を前にしておどおどしていた。
「ミスターフィリップ！今度時間に遅れてきたら、貴方には何も渡さないと言った筈ですよね。」
「Oh、許して下さい。これにはちゃんとした理由があるのです。」
お…大きい声。こんな近距離で大声を出さなくても…というくらい大きい。
「あたしは言い訳なんて聞きたくないの。言っておきますけど、あたしは貴方のビジネスがどうなろうと、まったく関係ないんですからね。」
「う…。」
フィリップと呼ばれたその紳士は、彼女の言葉に一瞬絶句し、大きいため息と同時にガックリ肩を落とした。しかし、すぐに諦めたような表情になって天井を仰いだ。
「ＯＫ、これ以上の弁解はこれでやめにします。お詫びに私に後でディナーをごちそうさせて下さい。いかがですか？」
そう言えば、研修所時代にもこうやって誰かに昼食をおごらせている光景を何度も見た様な気がする。なんとなく、フィリップ氏に同情したくなってきた。
「で、頼んだことはやってきたの？」
彼の表情が見る見るうちに嬉しそうな表情に変わっていく。
「もちろんです。私に入手できない物はないですね。その点では連邦政治局の情報部なんて目ではありません。」
おやおや大きく出たものだ。そりゃあ、中には俺みたいな半人前もいるから絶対に…とは言わないが、普通の情報部員ならまず情報収集において他人に負けることはない。ましてや一般人と比べるなんて、その技術だけても天と地ほどの差があるとグレンから教わっている。
「あら、それじゃあ、あたしがこのあいだ頼んだ物も分かったのかしら。」
「いや、あれは、ちょっと…。」
紳士はちょっと困って、内ポケットを探ってハンカチを取りだした。額から汗が吹きだしている。その汗を神経質に拭いさると、反対側の内ポケットから今度は白い封筒を取りだした。
彼女はその白い封筒を中身も確かめずにセカンドバックにしまうと、やっと俺の存在を思い出したかのように彼に紹介してくれる。
「えーっと、彼はミスターフィリップ。一応、一流貿易商のディーラーで、たいがいの物なら彼に頼めば手に入れてくれるわ。」

「どうぞ、よろしく。」
フィリップ氏は先ほどとは打って変わった見事な手さばきで名刺を取り出すと、俺の方に差し出して微笑む。いわゆる営業スマイルという奴だ。今どき名刺なんて使う奴がいるとは思っていなかったから、一瞬戸惑って、そしてすぐ思い直して受け取る。何か彼についての手がかりが掴めるかと考えたのだ。しかし、彼の名刺には、彼女が紹介してくれた以上のことは何も書いていなくて、特に新しい情報は得られなかった。
「で、こちらは三好…、三好…、たっちゃんって下の名前、何だったっけ？」
「三好栄次です。よろしく…。」
「あっ、そうそう栄次だった。いつもたっちゃんって呼んでいたから、本当の名前なんてすっかりと忘れていたわ。あたしとはアカデミーの同期でね、現在は信州局の科学部に籍を置いているわ。*POWLA* システムを扱うことのできる数少ない人材よ。」
一瞬、彼女の誤りを訂正しようとして、なんとなく情報部に移ったことをここで話すのはまずい気がしてやめてしまう。フィリップ氏にとって、俺が科学部の人間か情報部の人間かなどということは些細なことでしかないだろう。
それより、ここまでの彼女の紹介の仕方を見て、何故わざわざ彼を紹介する気になったのかが気になる。
「Oh、*POWLA* システムを扱えるのですか、それは素晴らしいです。」
彼は急に感心したような表情を作ると、メニューを見ながら大声でマスターにモカブレンドをオーダーした。
なんとなくだけど、彼女が俺に何かを隠しているとすると、このフィリップ氏が何か大きな鍵になるような気がする。まぁ、その関係をとりあえずは無視するとしても、彼のディーラーとしての腕前も気になるところだ。
「私は個人的に *POWLA* システムには興味がありまして、貴方の様な人物とお知り合いになれたことはとても嬉しいのです。」
「でも、ディーラーとしては *POWLA* なんかより、*CAPERA* の方がずっと金になるんじゃないんですか？」
「ＮＯ、*CAPERA* の情報ならいくらでも…。Oh、これはミスターミヨシにやられました。これで貴方には警戒されてしまった。」
べつに引っかけた訳じゃないんだけどね。そんなつもりはなかったんだが、以前グレンからそういう *POWLA* の情報を欲しがっている団体があることを聞いていたのを思い出したのだ。
「莫迦ねぇ、まったく誰彼構わずすぐに *POWLA* の話しをするから、そうやって誤解されるのよ。フィリップって昔は連邦政治局に入って *POWLA* のオペレーターになるんだって言ってた人なのよ。まぁ、結局のところ才能がなかったというか、オペレーターどころか連邦政治局にも入れなかったんだけどね。」
「その通りです。ですから、私は貴方や *MIKA* みたいに毎日 *POWLA* を触れる人が羨ましいのです。」
嘘だ…、いくら鈍い俺でもすぐ分かる。彼女がフォローしなかった方がまだ騙されていたに違いない。だいたい、彼女が他人のミスをフォローするような性格であるものか。人間の性格なんてそう変わるもんじゃない。

どうする、一応 *Ryo* 先輩には連絡を取っておくべきか？情報部には色々な情報伝達手段が与えられている。相手に悟られないように連絡を取ることは不可能ではないが、ここで俺が変な行動を起こせば、今度は俺が疑われてしまう。具体的な情報を送るのは避けた方がいいだろう。
とりあえず安直だが、俺は緊急用の発信機を使うことにする。これで *Ryo* 先輩が地球上にいる限りは、俺に何かが起きたことを知るだろう。しかし、悲しいことだが、*Ryo* 先輩が地球上にいないことの方が多いのは事実である。無事に届くかどうかは、神のみぞ知る…というところかもしれない。
「ね、いいわよね？」
「え…？」
発信機のスイッチを入れた途端に急に彼女の顔が迫ってきたので、慌てて視線を彼女に戻す。どうも、2 人して俺に何かを言ってたらしいのだが、生憎と俺は何も聞いてなかったのだ。
「やぁねぇ、また聞いてなかったんでしょ？」
「え…、何が…？」
「フィリップが今夜のディナーを一緒にどうだって言ったのよ。」
彼女は呆れたという表情で肩をすくめる。
フィリップ氏は、まぁまぁという感じで彼女をなだめてから、聞いてなかった俺の為に、もう一度丁寧にディナーの誘いをかけてくれた。
「いや、都合が悪ければ無理にとは言いませんが、もしよろしかったらご一緒にいかがかと思ったのです。」
「よろしいんですか？」
「どうせ *MIKA* にはごちそうしなければならないし、私もできることならもう少し貴方と話しがしたいのです。」
一瞬そう悪い男ではないのかもしれないと思える。それにひょっとしたらこの申し出はこっちにとっても好都合かもしれない。いいにしても悪いにしても、どっちにしても確認だけはしておかねばなるまい。俺は素早く頭の中で 2 つの考えを天秤に乗せ結論を出した。
「えぇ、喜んで。しかし、本当にお邪魔ではないんですか？」
俺はわざと彼女の方に視線を移す。
「そんな、*MIKA* とは単なるビジネスのおつき合いです。それより、今夜はたっぷりと *POWLA* の話しを聞かせて貰いますよ。」
フィリップ氏は急に上機嫌になり、まだ半分呆れたように俺を見ている彼女とは対称的だった。
「しかし、残念なことに、私はその前にもう 1 つビジネスをしてこなければなりません。申し訳ありませんが、今夜 9 時にカレドアホテルのロビーで待合わせということでよろしいでしょうか？」
いいも悪いも、この話しはもともと彼女とフィリップ氏との間で出てきた話しなんだから、俺に決められっこない。それに基本的には、俺はどこに何時だろうと、それが物理的に不可能ではない限り別に異存はない。
仕方がないので、俺は答える代わりに彼女の方を見ていた。
「えぇ、いいわ。じゃあ、今夜 9 時にカレドアホテルのロビーね。」
俺は黙って彼女の台詞に肯いた。
「それでは失礼します。ミスターミヨシ、必ず来て下さいよ。」
フィリップ氏はそそくさとライアングを出て行った。その後ろ姿には、まさしくビジネスマンとし

ての熱気が感じられる。
「じゃあ、あたしも失礼するわ。たっちゃんもあんまりこんな所で油売っていると怒られても知らないわよ。」
おいおい、自分から引き止めておいてそれはないだろう。喉まで出かかっている台詞を飲み込んでしまう。彼女は店の外から手を振ると、雑踏の中に消えて行った。
しかし、やっぱり言っておけば良かったと、次の瞬間には少し後悔した。
まぁ…、いや、いいんだけどね。なんとなく、やられたという気持ちより、笑いが込上げてくる。
それには研修所時代から何も変わっていない彼女が確かにあった。そう、テーブルの端にわざと置き忘れられた 3 人分の伝票 1 枚。
さぁて、*Ryo* 先輩にはなんて報告しようか。

第二章　「波紋」

H.6.18.MAR

第三章　「現象」

結局、あの夜のディナーは素晴らしかったと言わざるを得ないだろう。フィリップ氏も彼女も、こっちの予想に反して *POWLA* については一切触れずに、終始和やかな雰囲気で食事をさせて貰った。
しかし、お陰で *Ryo* 先輩には置いて行かれてしまったのだ。あの後、簡単な報告をした俺に、*Ryo* 先輩は彼女の身辺調査と *POWLA* の護衛をするように言ったのだ。とりあえずファズアースの調査はシモさんとくまさんの手を借りるからいいとのことだった。
急にまた暇になってしまった俺は、自分自身の興味も合わせて彼女の経歴を調べていた。お陰で EC まで行かなくてはならなかったが、それなりの報酬もあった。
まずは彼女の勤務歴なのだが、おおよそ半年に１回の割合でステーションを異動していた。通常のステーション勤務の場合、本部局からの通達で最低でも３年は異動しないことになっている。彼女の場合、何故半年毎に異動しているのか、その理由がはっきりしないのだ。
もう１つはＥＣの情報部で聞いた話しだが、最近になってから急に *POWLA* システムのトラブルが増えてきたというのだ。確かに昔から *POWLA* はトラブルことで有名なコンピューターではあったが、それは *POWLA* 端末側の故障であって *POWLA* 自身の故障ではなかった。*POWLA* 自身はこれまで１回も停止した事はなかったはずだ。それが現在では、*POWLA* の故障といえば、それは *POWLA* 本体の故障を差す様になっているらしい。
これが一般に知られていない理由は、ひとえに *POWLA-TWIN* によるところが大きいのだ。*POWLA-TWIN* は *POWLA* 本体のバックアップが目的で作られた端末だけあって、本体がダウンしている間は *POWLA-TWIN* が本体と同様の働きをしている。従って、端末側から操作している分には本体がダウンしているなんて事は分からないようになっているのである。恐らく連邦政治局の局員でさえも、一部の人達を除いてこの事実を知らない思う。
こういうことが可能なのも、*POWLA* システムの柔軟性のお陰だった。*POWLA* システムというのは、巨大なデータベースである *ANDREA* と、それを制御している *CATELINA* と呼ばれる２つの移動衛星が核になっている。*POWLA* 本体というのも、システム全体から見れば単なる入出力装置でしかなく、端末機との違いは *ANDREA* にアクセスできるかどうかの違いしかない。つまり、端末機は *POWLA* 本体が *ANDREA* から引き出した情報を利用するしか機能を持っていないのだ。
で、話しを彼女に戻すと、どういう訳だか彼女の異動先と *POWLA* 端末の故障の増加がぴったりと一致する。彼女が以前いたステーションＲＸやステーションＵＸ等、いずれも原因不明の故障が続き、ステーションＵＸの方は彼女の異動と共に故障もなくなっているのである。ちなみにステーションＲＸでは、現在でもまだ復旧の見通しがついていないという話しだった。
POWLA の故障原因としては、データ量の急激な増加と処理能力の低下が考えられているけど、こうやって考えてみるとそれだけではないような気がしてくる。ただし、これらの現在分かっている故障原因は、*POWLA-KNIGHT* が稼働してしまえば全て解決してしまうものだった。
もし、彼女がこの一連の *POWLA* の故障に関係があるとしたら、この事を知っているのだろうか？それとも本当に俺と会ったのは偶然なのか…。
いくら考えてみたところで、所詮は全てが俺の推測でしかない。彼女の異動先にいつも *POWLA* があるのは、彼女の１級情報工学士という資格からすれば当然のことなのかもしれない。

…ん、1 級情報工学士か…。
待てよ、なんで 1 級の資格を持っている彼女が、*POWLA* 本体と *POWLA* 端末機の扱い方の違いを知らなかったんだ？いくら実際に触ったことがないとはいえ、知識として知っていなかったということはないだろう。少なくても 1 級を取る為には、当然必修科目になっているはずだ。だとすれば、彼女の 1 級という資格が嘘か、彼女がわざと壊しているかのどちらかということになる。
「たっちゃん…、たっちゃん…！」
「えっ…？」
「また、ボーッとしている。」
「佛木せんぱい…。」
いつの間に入ってきたのか、俺の前には文化部の室長が立っていた。
「珍しいね、たっちゃんがこんなに長くここにいるなんて。また、ドジでもしたのか？」
「佛木先輩、俺ってそんなにいつもドジを踏んでいるように見えます？」
「見える！」
駄目だ、こりゃ…。
「それより、最近、どこに行っているんですか？文化部にあまりいないようですけど。」
「おっ、鋭いね。さすが…。」
「しっ…、佛木先輩、俺はあくまでもここにいる間は科学部の人間ですからね。俺が *Ryo* 先輩に怒られるんですから、気を付けて下さいよ。」
「分かってるって。」
市瀬中尉の件に関わってから、余計気にしているっていうのに、一番彼女に近い位置にいる人がこれなんだもんな。
「で、どこに行っているんですか？」
「研修所だよ。」
「何しに？」
「講義をしに…。いま特別講師で研修生に文化史を教えているんだよ。」
「航海士のライセンスはどうなったんですか？」
「一応、2 級は取ったよ。でも、アルトロンを明子ちゃんに使われたままだから、まだ 1 回も外には出てないけどね。」
「カリフォンがあるじゃないですか？」
「あれはまだ恐くて乗れないよ。」
まぁ、あれには新型推進装置なんて代物が乗っているから、ライセンスを取ったばかりの佛木先輩にとってはそうなるんだろうな。
「そうか…、ところで彼女、元気ですか？」
「まぁね、でも未だにシュレ達の行方は分からないみたいだね。」
バーミリオンキャット系第 1 番惑星キャティ、彼女がそこに行ってからもう 2 年余り、たしか最後に会ったのは小惑星帯で最後に猫達とコンタクトを取った時だった。
「キャティは最近電波障害がひどいから大変でしょうね。」
「でも、定期報告は毎週きちんと入っている。心配はないよ。」
ははは…、彼女らしいな。そういえば昔は文化部の 3 人娘とか呼ばれていたけど、明子ちゃんはキ

ャティに行ったままだし、柴野さんはベルギーに異動になってしまったし、*Mya* は退職して和岐さんと一緒に行方不明か、みんなバラバラだな。
「そういえば、佛木先輩のところの市瀬中尉、びっくりしましたよ。彼女とは研修所時代クラスメイトだったんです。」
「あぁ、聞いたよ。彼女はどういう訳だか今まで異動が多くてね。ここでようやくのんびりできそうだって喜んでいるみたいだよ。」
「へぇ…。」
「あの 3 人娘がいなくなってから、アリコちゃんにも随分と寂しい思いをさせてきたからね、正直言ってやっとホッとしているよ。」
ここ数年、とくに大きな事業もなく、信州局全体が静かだったことを考えれば仕方がなかったことかもしれない。
「あ、そうか…。」
「たっちゃん。何？」
そうか、あの人なら市瀬中尉が何故ここに来たのか知っている筈だ。
「いえ、ちょっと急用を思いだしたものですから。そのうちに文化部の方にも顔を出しますから、ゆっくり研修所の話しでも聞かせて下さい。」
「うん、それじゃ…。」
そうだよ、ここで一番詳しい人がいるじゃないか。佛木先輩の顔を見ていてようやく思いだした。どうしたものか一瞬考えて、階段を一気に駆け登る。5 階の局長室に辿りつくまで、その間約 1 分、少し激しくなった呼吸を沈める為 2 回深呼吸し、落ち着いたところでドアをノックする。
すると…。
「入りたまえ、三好少尉。」
なぜか局長の声ではなく、別の人の声が返ってくる。ちょっと緊張してゆっくりドアを開けると…。
「さっさと入りたまえ、局長はずっとお待ちかねだぞ。」
グレン大佐！どうして彼がここにいるんだ？
一瞬、頭が混乱しかけたが、いまさら逃げることもできない。部屋の中に入るとゆっくりドアを閉める。
「久しぶりだな、三好少尉。ここへ来てから 10 日余り、ようやく私の所に顔を見せるとはいい度胸だ。」
「あ、いえ、そういう訳では…。」
「申し分けありません。自分の教育がいき届きませんで…。」
しどろもどろになった俺を見て、グレンが代わりに局長に謝罪している。ちくしょう、なんでベルギーにいるはずのグレンがここにいるんだ。
「で、何の用だ？」
「は…？」
「用があって私の所に来たんじゃないのか？だったら、用を言いたまえ。」
う…、相変わらず無愛想の塊みたいな人だ。
「あの…、実は市瀬中尉のことでお訊きしたいことがありまして。」
「彼女の異動理由か？」

「そ…そうです。」
局長は何らかの意味でグレンに目配せしていた。雰囲気としては、「ほら、見ろ。」と言っているように受け取れるが…。
「その件ならグレン大佐から聞きたまえ。他には？」
「いえ、ありません。」
「では、科学部の部屋で待ちたまえ。」
「はい、失礼します。」
最初の勢いはどこに行ってしまったのか。くやしいけどここは素直に引き下がるしかない。
なんとなくだらけた気分でエレベーターのボタンを押す。待つこともなく降りてきたエレベーターに乗り込むと…。
「あら、たっちゃん、どうしたの？」
「あ…。」
まったく、いま一番会いたくない人に会ってしまったような気がする。
「何よ、元気がないじゃない。何かドジでもやったの？」
「いや、別に…。」
会話するほどの間もなく、3 階で扉が開く。
「あっ、ミスターフィリップが、またたっちゃんを食事に誘いたいって。」
「いつでもあいてるからって伝えておいて。」
「うん…。」
閉りかけた扉を片手で支えたままで、彼女は手を振っている。俺はと言えば、手を振る元気などありもしないくせに律儀にも右手を振っている。
はぁーっ、これから起こることを考えるとだんだん落ち込んできた。
科学部に戻ってみると、シモさんとくまさんが帰ってきていて、部屋は大騒ぎになっている。
「2 人ともお帰りなさい。外はどうでした？」
「まぁね、あまり良かったとは言えないけど、それなりに得る物はあったよ。」
そんなに変わりのないくまさんに対して、シモさんの方は一目見て分かるくらいに機嫌が悪いのが分かる。
「実験はうまくいかなかったんですか？」
「うまくいくどころか中止だったの。実験の 5 分前になって、突然 *CAPERA* 側から中止の指令が来てね。その理由がまたはっきりしないものだから、余計に頭にきてんの。」
シモさんは持っていたファイルの束をバサッとデスクの上に放り投げると、怒って部屋を出ていく。
「たっちゃん、行かなくて正解だったよ。私はとりあえずシモさんのアシストだったからそんなに気にしていないけど、*Ryo* なんかもなんかもめていたみたいだし、結局 2 人とも予定したものは何もできなかったようだよ。」
「ふーん、で、*Ryo* 先輩は？」
「私達を送り届けた後、すぐに調べたいことがあると言ってファズアースに戻ったよ。」
くまさんから詳しく話しを聞いてみると、どうも 3 人はファズアースとコンタクトを取ろうとしたらしい。ところがそこに別の連邦政治局の船が現れて邪魔をしたとかで、*Ryo* 先輩はその船を追っていったということだった。

結局、*CAPERA* 側は実験中止を一方的に伝えてきたのみで、詳しい説明も何も一切なしだった。たぶん、これではシモさんでなくても怒るだろう。
「とりあえず暫くはアルトナイトの方に力を貸せると思うし、シモさんもきっとそのつもりだと思うよ。」
「はい、よろしくお願いします。」
くまさんにお願いしますと頭を下げた時に、グレンが部屋の入口に立っているのが目に入った。
「くまさん、呼出しがかかったみたいなんで、ちょっと行ってきます。」
「あぁ、じゃあ、気を付けて。」
グレンの立っていた場所には暗号が残っていて、既にグレン本人の姿は見当たらない。俺は素早くグレンの痕跡を消し去ると、外階段を使って屋上に上がった。
「情報部、三好少尉、入ります。」
屋上だから入りますはおかしいかと思いながらも、形式通りにそう言ってみる。
「ミヨシ、こっちだ。」
グレンは貯水槽の陰にいた。さすがに身を隠すのが巧い。俺は一瞬誰もいないのかと思ったくらいだったのだから。
「なぜ、グレンがここへ？」
「文化部の市瀬中尉は *CAROON* のメンバーなのだ。」
「*CAROON* とは何ですか？」
「*CAPERA* システムを作った企業だ。市瀬中尉はそこの幹部クラスの人間なのだ。我々は 1 年ほど前からずっと彼女の行動を追ってきたのだ。」
やっぱり…、するとフィリップ氏はさしずめ連絡員というところか、しかし、それくらいのことでグレンがここに現れるのはどう考えてもおかしい。
「まだ分からないようだな。」
「何がですか？」
「君は我々の計画を邪魔しているのだ。彼女の周囲にいられるとこちらの都合が悪いのだ。手を引きたまえ。」
「そんな、私はべつに任務で彼女と接触している訳では…。」
「分かっている。しかし、同じことだ。現在はまだ君が情報部員であることに気付いていないようだが、いずれ君の正体が彼女に知られることになるだろう。そうなった時、つまり敵に我々が追っていることを知られると計画に支障が生じるのだ。」
「分かりました。アルトナイトが完成し次第、ここを離れます。」
「いいだろう。それともう 1 つ、君に新しい任務だ。」
「何でしょうか？」
「キャティからの連絡がここ 1 週間途絶えているのだ。キャットテイル・をサポートしてやってくれ。」
「はい…。」
グレンはやっといつもの笑顔を浮かべると、すれ違いざまに俺の肩を 2 本の指でポンポンと 2 回叩く。
確か…、記憶に間違いがなければ、この合図は俺に敵のマークが付いていることを意味しているは

ずだった。下手をすると盗聴器の類が付いている可能性すらあるということだ。
仕方がない、キャティも気になるし、グレンからの命令に逆らえる訳もあるまい、暫くキャティに行ってみるか。
あ、でも、どうせなら…。うん、そうか…、いい考えが浮かんだ。

第三章　「現象」

H.6.19.MAR

第四章　「真理」

「こちらカリフォン、キャットテイルⅧ応答せよ。」
「カリフォン、どうぞ。」
キャティを見るのも実に久々だ。相変わらず美しい惑星だと思う。しかし、以前 *MR-7* 星の許で輝いていた時に比べてちょっと暗く感じる。
「着陸許可願います。」
左手に見えているバーミリオンキャットは、*MR-7* 星に比べてかなり赤く、温度が低い恒星だ。美しいとは思わないが、太陽にちょっと似ていて、妙に懐かしさを感じる。
「3 番ポッドにお入り下さい。」
「了解。」
指示されたポッドはグリーンの点滅ですぐ分かるようになっている。俺はキャットテイルⅧから送られてくる誘導信号にカリフォンを委ねて、ここでやっと一息ついた。あとは向こうが勝手に誘導してくれる。
いつまでたっても完成しないアルトナイトに見切りをつけて、文化部のカリフォンを強引に借りてきてしまったが、ことキャティに関する限りこいつを借りてきたのは正解だった。はっきり言って、ここまでほとんど何もすることがなかったのだ。
「ドローブリッジ接合完了。下船して下さい。」
さぁ、行くか。メインパワーをサブに切り換える。カリフォンは新型推進装置の都合上、パワーを完全に落とすことができないようになっている。おそらくアルトナイトが完成する頃にはこの問題も解決はしていると思うけど。
カリフォンを降りるとブリッジが本体のすぐ脇まで来ていて、何も考えなくても案内して貰えるようになっている。以前ここに来た時にはここまで便利にはなっていなかったはず。僅か 2 年くらいでよくここまで変わったものだ。
「こちらです。指令室に案内致しますので、こちらにどうぞ。」
ブリッジの端で女性が 1 人待っていた。身に付けている制服も昔に比べて随分デザインが良くなっている。
「ここへ来るのは久しぶりですが、随分と雰囲気が変わりましたね。」
「えぇ、地球の文化が入ってくるようになってから急に…。でも、あたしは昔ののんびりとした雰囲気の方が好きだった。」
その言葉の中には明らかに俺に対する…、いや地球に対する嫌味が込められている。
「そうでしょうね、地球にいてもそう思う時がありますから。でも、気の持ちようですよ。漠然と生きていれば周りに流されます。だから、周りはどうであれ、貴方はその気持ちを忘れないことです。」
「あなた…、変わっているわ。いままでここに来た地球の人でそんなことを言ったのって、あなたが初めてだわ。」
俺はそれに答える代わりに肩をすくめてみせる。
「あたし、ミクラ。あなたは？」
「三好…、ミヨシエイジ。」

白くくねった通路を案内して貰って、やっとキャットテイルⅧの指令室に辿りつく。
「指令、案内してきました。」
指令室のドアが開いた瞬間、凄じい熱気が吹き出してくる。ミクラが指令と呼んだ男がその中から近付いてきた。
「なんだ君か…。それならそう言ってくれればよかったのに。」
「クロノも元気そうで。」
「今日はわざわざ何の用だい？」
「最近の伝波障害の件でこっちにも協力をお願いできないものかと 思いまして、相談に来たんです。」
「そうか、その件ならキャットテイル-セブンの方が詳しいだろう。あとで連絡を取ってみるよ。」
「キャットテイル-セブンって、まだあったんですか？」
「また作ったんだ…。そのバルチェがね、落ち着いてくれないんだ。」
なんとなく分かるような気がする。くまさんが初めてキャティに来た時も、確かナイトウォーカーで真っ先に飛び出してきたのが、当時キャティの総指令官だったバルチェだと聞いたことがある。俺も何度かバルチェに会っているが、その度に俺のような立場を羨ましがっていたのを思い出す。
「でも、昔と違ってキャティの守備範囲も広がっているから、助かっているんじゃないんですか？」
「とんでもない、早いところ引退して落ち着いて貰いたいものだよ。まぁ、君に言ったところでこればっかりはどうしようもないんだがね。」
相変わらず弱気なところは変わっていないようだ。昔から俺には喋りやすいのか、よくこうして愚痴を聞かされる。そのせいか、どうしてもバルチェよりクロノの方に親しみを感じてしまう。
「まぁ、君も疲れたろう。いま居住区の方にベッドを用意させるから、もう少ししたら案内させるよ。」
「ありがとうございます。」
クロノは俺の肩にポンと手を置いて、スクリーンの方に行ってしまった。入れ替わりにミクラが近寄ってくる。
「ミヨシって凄いのねぇ。ここでクロノと対等に話しができる人なんて１人もいないわよぉ。」
「まぁね…。ところで、ここに湯浅明子という地球人がいるはずなんだけど、どこにいるか知らないか？」
俺が明子ちゃんの名前を出した途端にミクラの顔がパッと明るくなる。
「知っているわ。あたし、あの方に憧れているんですもの。あたし、女性とはああいう風にあるべきだといつも感じているわ。」
「で、どこにいるかは分かる？」
「たぶん、居住区の方か…、ひょっとしたらキャットテイル-セブンかもしれないけど…。ミヨシ、あの方と会うの？」
「うん、任務を伝えなきゃならないからね。」
向こうの大きなスクリーンにバルチェの顔が映っている。どうやらキャットテイル-セブンと連絡がついたらしい。スクリーンの前のクロノが手招きをしている。
「ちょっと、ごめんね。」
何か考え込んだミクラをそこに置いたまま、スクリーンへと駆け寄る。

「ミヨシ、ひさしぶりだな。電波障害の件だそうだな。ファズアースのデータなら揃っているよ。いつでも取りに来るがいい。」
「ありがとうございます。」
「それではあとで。」
スクリーンは小惑星帯の風景に変わる。
まったくバルチェも全然変わっていない。必要なことだけ言うとサッサと通信を切ってしまうのは昔と同じだ。
「どうする？行くんだったら誰かに案内させるが。」
「えーっと、そうですねぇ…。」
どうしようか…、とくにここにいなければならない理由はないんだけど…。
「あたしが行きまぁす！」
ん…、ミクラ…。
「指令官、いいでしょ？ねっ、いいですよね？」
クロノの方を見るとノーコメントの仕草。完全に俺に任せるつもりらしい。はっきり言えば、べつに案内なんかなくてもキャティで迷子になることなんかはないと思うんだけど…。どうしようか？
「ミヨシ、すまないが、もし迷惑でなければ連れていってやってくれないか？」
「べつにそれは構わないんですが、一つ訊いていいですか？」
「なんだね。」
「昔、指田大佐から聞いた話しなんですが、湯浅中尉達がここで大騒ぎをしたばかりに、キャットテイルⅧでは女性隊員を絶対に採用しないと決めたとか。」
「確かにそうだったんだが、バルチェの一言でね、今後は彼女達のような人材が必要になってくるから、慣れた方がいい…とね。」
そりゃ、バルチェの意見の方が正しいと思う。
「なんとなく分かりました。まぁ、お気持ちは察します。でも、本当に慣れれば気にならなくなりますよ。」
少し肩を落としているクロノを励ますと、クロノがそっと耳打ちする。
「しかしね、キャットテイル-セブンには女性隊員がいないんだよ。」
バルチェったら…、たぶん必要性は感じていても女性に対する受け取り方はクロノとそう違わないんじゃないかな。それで、自分はキャットテイル-セブンを作ってここをクロノに譲ったのか。
俺は吹き出しそうになるのを懸命に堪えながら、話しが見えていないミクラに向かう。
「連れていく代わりに条件がある。」
「なんですか？」
「決めたことは必ず守ること。納得がいかないことであれば、先に質問すること。分かった？」
「はい。」
分かったのか分かっていないのかは別として、ミクラは力いっぱい肯いた。とりあえず信用することにしよう。どうせ駄目でも俺はあの３人で慣れているし…。
「では、行ってきます。」
「あぁ、よろしく…。」
ミクラの案内でキャットテイルⅧの外に出ると、ちょうど建物と建物の間にバーミリオンキャット

が沈みかけているのが目に映る。ただでさえ赤い光りがいつもよりさらに赤さを増していて、一瞬バーミリオンキャットに飲み込まれたかと錯覚を起こすほどだ。
「どうしたんですか？」
「いや、なんでもない。」
俺がここに来たのは正しかったのか間違っていたのか、そんなことはまだ分からないけど、少なくてもあの夕陽を見ていて一つだけ確信したことがある。ここでは地球のやり方は通用しないということ。
どうせ俺には俺のやり方しかできないし、ここに来るやり方が俺しかできないやり方なら、俺は最後まで自分を信じてやってみるしかない。

第四章　「真理」

H.6.20.MAR

第五章　「決死」

まさか、まだ実験船のキャティを使っているとは思わなかった。ま、キャットテイル-セブンという名前を聞いた時点で気付くべきだったのかもしれない。ここのことなら何もミクラに案内などさせるまでもなくよく知っていた。
入口でバルチェの名前を出すと簡単に通してくれた。この辺の連絡はしっかりしていて、過去１度でもバルチェとの連絡で行き違いになったことはない。
指令室の位置も昔のままで、バルチェは昔と同じ位置に立っている。
「まさか君が来るとは思わなかったよ。てっきりサシダが来るとばかり思っていた。」
「指田大佐は別の任務で忙しいので…、別の任務とは言ってもファズアースにはもちろんかんでいますが。」
「そうだろうな。ま、ゆっくりしていきたまえ。君の部屋はそのままにしてあるし、ユアサもこの時間なら自分の部屋にいるだろう。」
「はい、ありがとうございます。」
俺は丁寧に頭を下げるとバルチェの言葉に甘えて指令室を出てきた。もちろん、ミクラは黙って俺についてきている。とりあえず自分の部屋を久しぶりに覗いてみよう。きっと埃だらけに違いない。前回ここに立ち寄った際にバルチェから、もうこの船は使わなくなるから部屋がかなり空いてしまうので、気にせず自由に使って欲しいと割り当てられた部屋だった。だから自分の部屋と言っても入るのはそれ以来ということになる。何もない殺風景な部屋を想像するに、真っ直ぐ明子ちゃんの部屋に行った方が賢明かなという気もする。
しかし、せっかくのバルチェの好意を無駄にするのも悪い。やっぱり見るだけ見ておこう。
「うわぁ、懐かしい…。あたし、まだ子供だったけど、この辺でよく遊んだのは覚えている。」
床の色がグレーからブルーに変わる。ここから居住区だ。ミクラはおもわず出てしまったという感じで言葉を出す。
「ミクラ達はずっとここに住んでいたんだから、俺なんかよりずっと思い出が残っているんだね。ほら、ここが俺が貰った部屋だ。…ん？」
ミクラにそう言いながら指差したドアが、他と少しだけ違うことに気付くのにそんなに時間はかからなかった。どう見たところで他のドアに比べて綺麗なのだ。いくらバルチェが気の利く男と言っても、俺がキャティに着いたことを知ったのはほんの数分前のことの筈なんだ。いったい、誰が…。
俺はちょっと緊張しながらロックを解除した。中は…、何もない筈の部屋の中は、いままでここで生活していたかのように完璧にすべて揃っている。バルチェから割り当てられた時には確かに何もなかったはずなのに…。しかも埃一つ落ちてない。
「へぇ、素敵な部屋ですね。」
「俺もそう思うよ。とにかく湯浅中尉の部屋に行ってみよう。」
とりあえず明子ちゃんに訊けば何か分かるだろう。そう思って２ブロック先にある明子ちゃんの部屋へ向かう。途中、何人かの男性とすれ違ったが、そのいずれもがキャットテイル-セブンの制服に身を包んでいた。
ミクラに気が付かれないように小さく深呼吸して、そして明子ちゃんのドアを叩く。１度目、反応なし。１呼吸おいてから２度目。

「インターホンの方が早いんじゃないんですか？」
「大丈夫…、ほら。」
3 度目を叩く前に返事がしてロックが解除される音。このへんは昔みんなで決めた通り。
「どなたですか？」
「三好ですが。」
「えっ、三好せんぱい！」
ドアが勢いよく開いて、明子ちゃんが飛び出してくる。
「いったい、急にどうしたんですか？」
「ファズアースの件でちょっと頼みたいことがあってね。入っていいかな？」
「はい、でもぉ…、そちらは誰ですか？」
明子ちゃんは視線だけミクラに向ける。
「あの、あたし、ミクラといいます。あたし、貴方のファンで、その…、ミヨシに頼んで連れてきて貰ったんですが、あの、ご迷惑でしたでしょうか？」
視線だけがクリッとこっちに戻ってきて…、恐い、やっぱり怒っているかな？
「いえ、どーぞ、どーぞ、汚い部屋ですが。」
明子ちゃんに促されて部屋の中に入れて貰う。以前来た時よりもかなり物が増えているけど、平均的な女の子の部屋に比べれば随分とシンプルだと思う。
「で、頼みって何ですか？」
「地球に行って欲しい。そこで一つ芝居を打って欲しいんだけど。」
「芝居なら先輩の方が得意でしょうが、なんであたしが…。」
文句を言いながらもお茶を 3 人分持ってくる。ここに来ると必ず入れてくれるキャティ産の香りの高いお茶だ。
「実は死のうと思ってね。この芝居に参加できないんだ。」
「どうして！」
明子ちゃんとミクラが同時に叫ぶ。
「地球上から三好栄次という存在を消したいんだ。」
「そんなの先輩の得意分野じゃないですか。なにも情報部の力を使えば死ぬ必要なんてないと思いますが。」
ま、もっともな反応だな。きちんと説明しなきゃならないとは初めから思っていたことだからべつにいいけどね。さぁて、どこから説明しようか…。
俺はこれから話す内容を頭の中で整理しながら、大きく伸びをする。
「今回相手をしなきゃならないのは情報部の先輩なんだ。たぶん生半可の方法では勝てないと思うからさ。」
「それと死ぬのとどういう関係があるんですか？」
「とりあえず三好栄次は死んだということにしたい訳。ただ姿を消しただけだと、たとえ変装していてもすぐ疑われてしまう。三好栄次ではまずいけど、別の人物として表舞台に関与していたいんだ、今回はね。」
「*Ryo* 先輩は知っているんですか？」
「*Ryo* 先輩にも既にマークが付いてるからね、こっちからは下手に接触できないんだ。つまり、こ

れは誰も知らない。」
「別の人物になったとして何をするつもりなんですか？」
「ある人物の正体を探るんだ。情報部にはどこからか圧力がかかっていて、自由に動けない。」
明子ちゃんは真剣な顔つきで考え込んでしまった。
ただ姿を消しただけで死んでしまったと報告しても、最初はそれで騙せてもすぐにばれてしまうだろう。とくに *Ryo* 先輩なんかにはすぐ見破られる可能性がある。ここはシモさんには悪いけど、明子ちゃんのアルトロンを犠牲にするしかないな。
「ミヨシ、どうやって死んだことにするつもりなの？指令官には言うの？」
「小惑星帯に行く。あそこなら事故があっても誰も不思議には思わないだろう。で、明子ちゃんには申し訳ないけど、アルトロンを貸して欲しいんだ。たぶんそのまま返ってこないことになるけど。」
明子ちゃんはさらに考え込んで返事もしてくれない。
市瀬中尉の行動も気になるが、とりあえずファズアースの方も気になる。とにかく、できるだけ早く自由になれる時間が欲しい。その為にもここはどうしても明子ちゃんの協力が必要なんだ。
「で、どうだろうか？」
「どうしてもやるんですか…。というより、どうしてもやるんですよね。」
「湯浅中尉、お願いします。」
今までお互いの階級を気にしたことなんてなかったけど、正式に協力を要請する以上、きちんと手順を踏むしかないだろう。
「分かりました。…三好少尉、少尉の計画に同意します。この計画は現在をもって発動するものとします。なお計画の終了は三好少尉の生存が確認された時点で終了ということでいいですね。」
「はい、ありがとうございます。」
「無茶…しないで下さいね。」
「はい。」
最後の部分については半分は泣いて、半分は怒っているような感じ。それでも、上官としてこっちの手順に沿ってくれた。
「実はミクラにもやって貰いたいことがあるんだけど。」
「えぇと、何でしょうか？」
「小惑星帯にアルトロンで行った後、俺はアルトロンを壊さなくてはならないんだ。申し訳ないけどバルチェ達には分からないように、こっそり俺を収容して欲しいんだけど。」
「キャットテイルⅧの任務からは外れます。それに、もしあたしが小惑星帯に行ったら、きっと命令違反なってしまいます。」
「分かっている。だから無理強いはしない。その時は申し訳ありませんが、湯浅中尉に収容をお願いします。」
「その方がいいと思う。あたしなら事故が起きた時に真っ先に事故現場に行っても怪しまれないし。」
「でも、アルトロンは私が乗っていってしまう訳だし、たぶんバルチェが一緒について来ると思う。湯浅中尉が彼に見つからないように私を収容するのは難しいと思うんだろうな。」
「分かりました。あたし、やります。」

「無理しなくていいのよ。あたしの方ならなんとなするから。」
「いえ、やります。やらして下さい。」
「いいのか？」
「はい、その代わりすべてが終わった後でいいです。あたしを 1 度地球に連れていって下さい。」
「あぁ、約束するよ。」
明子ちゃんとミクラに協力を約束して貰った後、俺はもう 1 度詳しい打ち合せと最終目的を 2 人に告げた。ミクラは状況がよく分かっていない分、黙って聞いていたが、明子ちゃんはさすがに呆れた顔をしていた。
とにかく、市瀬中尉が *POWLA* を狙うなら、その証拠を掴むまでだ。ファズアース彗星でみんな忙しい中、動けるのが俺だけならば、やれるところまでやってやる。
「それじゃ、よろしくお願いします。」
2 人に頭を下げて立ち上がる。
「三好せんぱい！」
「今度会う時には笑顔の方がいいな。」
「え…？」
「だって、今日は怒った顔と泣きそうな顔しか見れなかったから。」
俺はそれだけ言うと明子ちゃんの部屋を出た。行き先はもちろんキャットテイルⅧに置いたままのカリフォン。
空を見上げると月の代わりに小惑星が光っている。まるで宝石のようだなと思いながら、よく考えたらこれから死にに行く場所だということに気付いた。
「三好栄次…、キャティの宝石に囲まれて死ぬ…か。」
いやいや、そんなロマンチックなもんじゃないな。自分で言っておいて、その陳腐さに自然と笑いが込み上げる。

第五章「決死」

『空の宝石に囲まれて』 ―空翔ける羊飼いの群れシリーズ 1―

H.6.20.MAR